ビー玉　。

葛籠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ビー玉　。

【Ｎコード】
Ｎ３１５３Ａ

【作者名】
葛籠

【あらすじ】
健志は、同棲中の彼女、遥とケンカをしてしまう。怒って出て行った遥を追いかけていった健志の前に、迷子の女の子が現れて…。

第1話

「健志のアホ！！」

日曜日。
いつものように、晩ご飯を食べ終わり、
いつものように、ソファーに寝転がり、
いつものように、テレビを見ていたら、
いつもと違う遥の怒鳴り声が、後ろから聞こえた。
後ろを振り向くと、携帯が俺の頭をめがけて飛んでくる。
見事に俺に命中。
役目を果した携帯が、床に転がる。

「痛！！何すんだよ！！」

頭を擦りながら、遥に文句を言った。
遥は、同棲している俺の恋人だ。
俺と同じ年の２５歳。
小柄で、笑顔のかわいい自慢の恋人。

朝から機嫌が悪いと思っていたが、まさか携帯が飛んでくるなんて。
いったい何が原因なんだ？

「俺が、いったい何したんだよ？」

台所から遥が近づいてくる。
足音までもが、「私は怒ってます。」と主張しているように聞こえた。

俺の横に立つと、遥は怒った顔で携帯を指差した。

「この、メールの雅美って誰なん！？それに、今日は何の日か分かってるん？」

「はぁ～？雅美って会社の同僚だけど。」

そう言えばさっき、メールが来たみたいだったな。

勝手にメール見たのか？

メールを見た事に文句を言おうとしたが、遥の異様な迫力に何も言えなかった。

それに、「今日は何の日かわかってるん？」遥の質問。

怒っている原因は、雅美からのメールと今日は何の日だったか？

この２つにあるようだ。

俺は、携帯に手を伸ばしながら、今日は何の日だったか考えた。

今日は、１２月１０日だろ。

クリスマスにしては、まだ早い。遥の誕生日でもない。

まさか、ごみの日って分けないだろ。

考えても、何の日だったか思い出せない。

「今日、何の日だった？」

遥に、恐る恐る聞いてみた。まだ、怒った顔をしていた。

それにしても、携帯が命中した頭が痛い。

「痛いな～。」思わず口に出してしまった。

これがまずかった。

遥の怒鳴り声が、上から降ってきた。

「痛い？私の心の方が痛いわ！！もう良い！！健志なんかもう知らん！！」

遥は、コートを手にすると勢いよくドアを閉めて出て行った。
俺は、部屋で呆然としていた。
まったく何なんだよ。
雅美の奴いったい何を書いてきたんだ？
頭を擦りながら、メールを見てみた。

『昨日はありがとう。健志君って優しいね。好きになっても良い？
雅美』

…マジ！？
昨日、雅美が仕事で大失敗をした。
あまりにも落ち込んでたから、会社の仲間達と飲みに誘って慰めてやったんだよな。
そしたら、雅美の奴酔っ払って大変で俺が介抱してやった。
神に誓うけど雅美とは、何もなかった。
可愛いかなって思うことはあるけど。
でも、まさかこんなメールを送ってくるなんて。
遥も怒るわけだ。
付き合って1年ぐらい経つけど、あんなに怒った遥は始めて見た。
1年…頭に何かが引っかかった。
カレンダーを見てみる。
12月10日に、ピンクのハートマークで印がしてあった。
携帯が命中した頭が痛んだ。
思い出せって、サインを送っているようだった。
「あっ！」
何の日か思い出し、思わず口に出した。

「俺らが出会った日だ。」

ハートマークを見ながら、遥と出会った日の事を思い出した。

第2話

1年前。

12月に入り街が、クリスマスに向けて準備をし始めていた。
恋人達が浮かれ始める時期。

土曜日の夜、友達と居酒屋に飲みに行っていた。
「クリスマスディナーどこで食べる？」
「プレゼント何にする？」
そんな会話が、あちらこちらで聞こえてきた。
彼女がいなかった俺は、同じく彼女がいなかった友達と話していた。

「俺達、クリスチャンじゃないしクリスマスなんて関係ないよな。」
「そうそう。彼女もいらないよな～。金が掛かるだけだしな。」

友達と、周りから聞けば負け惜しみにしか聞こえない会話をしながら、酒を飲んでいた。
本心では、「彼女が欲しい！！」って叫びながら。
それは、友達も一緒だと思う。
言い訳じゃないけど、たまたま2人共この時期に彼女がいなかっただけ。
決して、モテナイ訳じゃない。
ダメだ。また負け惜しみに聞こえる。
友達と彼女がいないと楽だとか、自由だとか、1人身の良さを語り合った。
随分と酒も入り、良い感じに酔っ払って店を出た。
友達と別れ、家に向かって歩いていく。

１２時近くになり、人の姿も見かけない。
周りは静まり返っていた。
急に、世界中から置いてきぼりにされた気になって、寂しくなった。

「やっぱり、彼女欲しいよな～。」

何となく空を見上げると、冬の澄みきった夜空に星が輝いていた。
もっと、近くで星が見たくなった。
近くで見るには高い所だよな。
必死に考えて思いついたのが、近くの公園にあるジャングルジムだった。
酔っ払った頭では、これぐらいが限界だったのかもしれない。
急いで、公園に向かって歩いていった。

公園に着きジャングルジムに向かって、一直線に歩いていく。
まるで、そこに挑むべき山があるように思えた。
酔っ払った体で、登っていく。
足を踏み外しそうになる。
「負けるものか。」
ちょっとした登山家気分だった。
一歩一歩上っていく。
ジャングルジムの頂上に到着した。

「やったぞ～！！」

思いっきり叫んだ。
なんともいえない達成感と共に、空を見上げた。
星が近くに感じた。

ギーコー。

音が聞こえた。
何の音だろうと思い、耳を澄ます。

ギーコー。ギーコー。

どうやら、ブランコが揺れている音のようだ。
誰か居るのかな？
ブランコの方に目をやると、女の子がブランコに乗っているようだった。

「こんな時間に？」

もしかして幽霊。嫌、でも俺は霊感ないはずだしな。
思い切って声を掛けてみた。

「何、やってるんですか？」

女の子が、こっちを見上げる。

「あんたこそ何やってるん？」

思いもよらない関西弁での返事が返ってきた。
どうやら、幽霊ではなさそうだ。
安心したと同時に、恥ずかしくなった。
ジャングルジムに登ってる様子や、
叫び声を聞かれたに違いない。

「見てた？」
「見てたし、聞いたで。やったぞ～！！ってな。」

笑いながら女の子が答えた。
やっぱり。
一気に酔いが覚めていく感じがした。
女の子が話を続けた。

「何か見えるん？」
「えっ？星がきれいなんだけど。」
「そうなん？うちもそこに行っても良い？」
「いいよ。」

女の子が、ジャングルジムに向かって歩いてくる。
思いもよらない展開だった。
もしかして、夢でも見てる？
そんな事を考えていると、女の子が隣に座った。

「おじゃまします。」
「いらっしゃい。」

お互い笑ってしまった。
顔を見てみる。
女の子って年でもないようだ。
俺と同じぐらいの、２０代前半って感じだった。
それに、かわいい。
笑顔が、たまらなくかわいらしい。

一目惚れ。

俺は、恋に落ちた。
何かの映画の台詞であったっけ。

「恋はするもんじゃない。落ちるもんなんだ。」
確かにそのとうりだなと思った。
一気に、彼女に向かって落ちていく感じがした。
見つめていると、彼女と目が合ってしまった。
慌てて、目をそらした。

「星きれいだろ。」
「ほんまやな。」

そう言った物の、星を見る所ではなかった。
ドキドキ。
胸の鼓動が早くなる。
彼女に聞かれてないか、心配になる。
まるで、中学生に戻ったかのようなウブな感じ。
静かな時間が流れる。
何か話さないと焦っていると、彼女がポツリと言った。

「ありがとな。」

何で、急にお礼を言われたのかが分からなかった。
「何が？」と聞き返した。

「うち、さっきな。彼氏と別れてんな。」
「そうなんだ。」
「他に好きな子が出来たから、別れてくれやて。ほんまにへこんだわ。」

可愛そうと思うと同時に、嬉しくもなった。
彼氏がいない。チャンスかも。
彼女の話を黙って聞いた。

「家に帰る途中、公園見つけてな、なんか黄昏てブランコに乗ってたら、
どっかの酔っ払いが、ジャングルジムに登り出してん。」
彼女が俺を見て笑った。
かわいい。
「しかも、大声でやったぞ〜！！やて。へこんでたのも忘れて、思わず笑ってもうた。
だからな、ありがとな。」
なんだか分からないが、どうやら彼女のへこんだ気持ちを、忘れさせてあげたみたいだった。
ジャングルジムに登って叫んでみるもんだと、良い気分になった。
「笑ってくれて、ありがとう。」
そう言って2人で笑った。
そういえば、彼女の名前何て言うんだろう？
聞いてみる。
「俺、健志って名前だけど、名前何ていうの？」
「うちか？」
耳を澄ます。
「うち、遥って言うねん。」
これが、2人の出会いだった。

第3話

遥と次の日、いや日付が変わっていたので、
今日、デートの約束をした。
待ち合わせは、２人が出会った公園。
待ち合わせの時間より３０分も早く着き、
ジャングルジムの周りを、ぐるぐる歩く。
ふと気付くと、子供が俺をジッと見ていた。
「変な、お兄さんがいる」（おじさんと思っていない事を願う。）
と思っているんだろうか。
なんだか恥ずかしくなって、その場を離れた。
待ち合わせの時間が近づき、
本当に、来てくれるか心配で時計を何度も確認した。
遥の姿を見たときには、心からホッとした。
遥が、俺の姿に気付き手を振りながら近づいてくる。

「待った？」
「全然。」

待ち合わせより、３０分も早く来ていたなんか言えない。

「行こうか。」
「うん。」

ジャングルジムから子供が、ジッと見ていた。
「これから、デートなんだぞ！！」
と子供に対して、勝ち誇った気分になった。

遥とたくさん話をした。

仕事の関係で、大阪から出てきて1人暮らし。
年も俺と同じで２４才。
趣味は映画。

俺も映画が好きだったので、話が盛り上がる。
あの作品がどうだとか。あの俳優が好きだとか。
同じ映画が好きってだけで、どうしようもなく嬉しくなった。
恋をするって、不思議な事だ。
遥の事を知るたびに、好きになっていく。

デートの帰りに、公園に行った。
２人が出会った公園。
空には、星が輝いていた。
ベンチに座って話をした。

「２人が出会えたのって、凄い偶然だよな。」
「そやね。うちが、彼氏と別れてなかったら来てへんかったやろうし。
　健志君も、酔っ払ってなかったら来てへんかったやろうしな。」

昨日の事を思い出し恥かしくなった。
照れ笑いをした。
そんな俺に気付いた遥が、
笑いながら「やったぞ～！！」って俺の真似をした。

「辞めろよな。」
「ごめん、ごめん。」

遥は笑っていた。
俺の好きな顔。

告白しようと思った。
もし、ダメだとしても後悔しないと思った。
どうしようもなく遥の事が、好きになっていた。

「俺な。」
「なに？」

遥の顔を見た。
心臓の鼓動が早くなり、手に汗がにじむ。
頑張れと自分に言い聞かす。

「遥の事が好きなんだ。付き合ってくれ。」

遥は、一瞬ビックリした顔をしたが、笑顔になった。

「ええよ。健志君優しいし、うちの事大切にしてくれそうやしな。」

やった。
周りから拍手が、聞こえて来るようだった。
嬉しくて思わず立ち上がった。
遥は、ビックリしたようだったが、
嬉しくてどうしようもなかった。
ジャングルジムの上に行き、思いっきり叫んだ。

「やったぞ〜！！」

遥もジャングルジムに登ってくると、俺の横に座った。
昨日と同じ。
遥と目が合った。
目をそらさずに見つめた。

キスをした。
星達が、祝福してくれているかのように思えた。

付き合って半年し、同棲し始めた。
お互い1人暮らしだったし、遥のそばに居たかったからだ。
遥が、俺の部屋に引越ししてきた時に言っていた。

「うちな、付き合った1年記念に、ペアリングが欲しいねん。」
「良いよ。」
「やった。」

遥は凄く喜んでいた。

その日が12月10日だった。
それなのに忘れていた。
ハートの印を見ると、どんなに楽しみにしていたのかが、
分かる気がする。
しかも、雅美からのメール。
遥が怒るのも無理も無い。
俺は、急いで遥を追いかけた。

第４話

「どこに行ったんだよ！遥の奴！」

遥を探して、走る。
良く行くコンビニを、覗いてみる。
コンビニの奥の方に、遥に似た後ろ姿を見つた。

「遥。」

近くに行って呼んでみた。
振り向いた顔を見ると、まったく違う顔だった。
何なのこの人って、顔をされる。

「すいません。」

謝ってその場を離れた。
周りを見渡しても、遥らしき人影はなかった。
商品棚のチョコレートに目がいった。
遥が、好きなチョコレート。
チョコレートを持ってレジに行った。
これで、許してもらおうとは思わないけど…。
外に出ると、風が冷たい。
時計を見ると、９時過ぎになっていた。
遥の事が心配になる。
電話を掛けてみようと、携帯を取り出した。
３コール、４コール、５コール…出ない。

電話を切って、携帯を見ると、
さっき、投げつけられた時に付いた傷があった。
なんで、記念日忘れたのかな。
初めて、公園であった時から、すごく好きになったのに…。
傷を、指で触れた。
「ごめん。」自然と口から出た。

ふと、あの公園に行ってるのかと思った。
きっと公園に行っている。
公園に、行く事にした。

思いっきり走った。
こんなに、必死になって走ったのは、
何年ぶりだろう？
運動不足の俺には、きつかったがそんな事も言ってられない。
走って、しばらくすると、
幼稚園ぐらいの女の子が1人で歩いていていた。
こんな時間に？
気になったが、遥の事も気になる。
どうしようかと迷ったが、
もし、迷子だと思うと心配だ。
女の子の前に、しゃがんで話しかけてみる。

「どうしたの？」

子供は、泣きそうな顔だった。

「ママが…帰ってこないから…お兄ちゃんと探してたの。」
「お兄ちゃんは？」

周りを、見渡しても男の子はいない。
女の子は、泣く一歩手前って感じだ。

「いなくなっちゃた。」

女の子は、泣き出した。
迷子だ。
お兄ちゃんと、はぐれたって言ってるし、
お母さんも帰ってこないって言ってるし、
女の子は、勢いよく泣いてるし…。
一体どうなってるんだ。
泣きたいのは、俺のほうだよ。
困った。

「泣かないで。」

女の子は、よりいっそう泣いた。
どうしよう。
さっきコンビニで買ったチョコレートの事を思い出した。
ポケットから、取り出し女の子に差し出した。

「どうぞ。」

笑顔で、チョコレートを差し出す。
女の子は、泣き止んでどうしようって顔をしている。

「はい。」

とびっきりの笑顔で、微笑みかけた。
まだ、迷っているようだ。

もう一息。

「はい、どうぞ。」

女の子の手が伸びた。
チョコレートの誘惑には、勝てなかったようだ。
それとも、俺の魅力的な笑顔に勝てなかったのかも。

「ありがとう。」

女の子が、笑った。
泣き止んだのは良かったけど、
これからどうしよう。
確か近くに交番があったはずだ。
交番に連れて行くか。

「お兄ちゃんと、おまわりさんの所に行こうか。」
「うん。」

そういえば、この子の名前何ていうんだろう。

「お名前、何ていうの？」

女の子が元気に答えた。

「ハルカ。」

第5話

ハルカだって。
俺は、笑ってしまった。
遥を捜しに来て、ハルカちゃんに出会うなんて。
1人笑っている俺を見て、
ハルカちゃんは、不思議そうな顔をしている。

「なんで、笑ってるの？」
「何でもないよ、ハルカちゃん。行こうか。」
「うん。」

俺は、立ち上がるとハルカちゃんの手をつないで歩き出した。

トコトコ。

小さい歩幅に合わせて歩いていく。
ハルカちゃんが、片手に大事そうにチョコレートを持っている。
時々、チョコレートに目をやっている。

「食べて良いんだよ。」

ハルカちゃんが、俺とチョコレートを交互に見て、
首を横に振ると、「がまんする。」と言った。

「どうして？」

聞いてみる。

「お兄ちゃんと、食べる。」

ハルカちゃんが、俺に向かって微笑みかけた。
「えらいね。」って俺も微笑み返した。
優しい子だなと思った。
遥、どうしてるだろうと気になった。
ハルカちゃんが聞いてきた。

「お兄ちゃんは、何で走ってたの？」
「えっとね、好きな子と喧嘩しちゃってね。
それで、好きな子が出て行っちゃたの。」

ハルカちゃんは真剣な顔をして、
「ダメだよ。ケンカしちゃ～。」と言った。
俺は、苦笑する。

「そうだね。」
「どうして、ケンカしちゃったの。」

子供は、素直に何でも聞いてくる。
俺も、素直に答える。

「お兄ちゃんがね、プレゼントを買い忘れちゃったから怒っちゃた。
」

ハルカちゃんは、何か考えているようだった。
急に立ち止まった。
「どうしたの？」って聞くと、ハルカちゃんが握ってた手を離した。

ハルカちゃんが、ジャンパーのポケットから、赤いビー玉を取り出した。
何だろうって思うと「はい。」って、赤いビー玉を俺に手渡した。
手の平に乗ったビー玉を見つめた。

「どうしたの？」
「これ、好きな子にあげて。女の子は大切にしなくっちゃ。」

手の平に乗った赤いビー玉が、とても綺麗で大切な物に思えた。
赤いビー玉を握り締めた。

「ありがとう。」

笑顔でお礼を言うと、ハルカちゃんも笑顔を返してくれた。

「行こうか。」
「うん。」

手をつなぎ、また歩き出した。
ハルカちゃんと、話す。
お母さんの事、お兄ちゃんの事、
幼稚園の事、お友達の事。
一生懸命話すハルカちゃんを見てると、
幸せな気持ちになってきた。
しばらくすると、交番が見えてきた。

第6話

「おまわりさんが居るから、もう大丈夫だよ。」
「うん。」

交番に、入ろうとすると人が出てきた。
目が合う。
よく知っている顔だ。

「遥！」
「健志！」

お互いに、驚いた顔をした。
なんで、こんな所に？

「交番で、何やってるんだ？」
「迷子を連れて来たやんわ。健志こそ何やってるん？」
「えっ？俺も迷子連れてきたんだけど。」

ハルカちゃんを見ると、きょとんってしている。
2人でやり取りしていると、交番から女の人と男の子が出てきた。

「ママ！お兄ちゃん！」

ハルカちゃんが、叫ぶとお母さんに駆け寄った。
「ハルカ。」お母さんが、ハルカちゃんを、抱きしめた。

「ハルカ心配したんだから。大丈夫だった？」
「うん。このお兄ちゃんが、一緒だったから大丈夫だったよ。」

ハルカちゃんが、俺を見る。
お母さんが、頭を下げた。
俺も、あわてて頭を下げた。

「本当に、ありがとうございました。」

お母さんが、お礼を言ってる横で、
お兄ちゃんと、ハルカちゃんが遊んでた。
微笑ましく思う。
よかったね。ハルカちゃん。
遊んでいる子供達に、お母さんが言った。

「ほら、タケシとハルカもお礼しなさい。」

タケシだって？

俺と遥は顔を見合わせると笑ってしまった。
そんな俺達を、お母さんと、子供達が不思議そうに見ていた。

警官に事情を聞いてみると、
お母さんの仕事が遅くなって、
家に急いで帰ったが、子供達がいなくなっていた。
捜したけれど見つからない。
困って交番に行ったら、遥とタケシ君が居た。
遥が、交番から出ようとしたら、
ハルカちゃんを連れた俺が来たって訳だ。

「ママと、お兄ちゃんに会えて良かったね。」
「うん。あのね、」

ハルカちゃんが、真剣な顔をしている。

「何？」
「もう、ケンカしちゃダメだよ。」

俺は、笑って「わかったよ。」と、
ハルカちゃんの頭を撫でた。

俺と遥は交番を出て歩き出す。
子供達が、手を振ってきた。
俺達も、手を振り返した。
「バイバイ。」

二人並んで、歩く。
俺が、今日の事を謝ろうとすると、
遥が口を開いた。

「タケシ君にハルカちゃんやって、思わず笑ってしもうた。」
「そうだな。同じ名前だもんな。」

本当に、妙な偶然だ。

「お母さん見つかって良かったな。」
「そやな。良かったわ。」
遥が笑顔で答える。
俺の好きな笑顔。
遥の、手を握る。

「記念日忘れて、悪かったな。」
遥は、何も言わずに無言で歩く。
まだ、怒ってるんだろか？
雅美の事も謝らないといけないな。

「雅美は、会社の同僚なんだ。昨日、落ち込んでたから、慰めてあげただけなんだ。
でも、まさかあんなメール送ってくるなんて、思っても見なかった。」

携帯を取り出してメールを打った。

『ありがとう。でも、俺には大切な彼女がいる。ごめん。』

メールの文面を、遥に見せると、雅美に送った。
正直な気持ち。
遥は、とても大切な彼女。
今日の出来事で、改めて思いしめされた。
遥が、大きくため息をついた。

「しゃ～ないわ。許したる。優しい健志君やもんな。」
「本当に、ごめんな。」

「わかったって。でも、気いつけや。うちも、もてるんやで。」
遥が、ポケットから何かを取り出し手に握った。
「これ、さっきタケシ君に口説かれて、プレゼント貰ったわ。」
遥が、俺の目の前で手を広げた。
手の平には、青いビー玉が乗っていた。
「遥も、貰ったのか。」
「えっ？」
驚いた顔で、俺を見た。
ポケットから、赤いビー玉を取り出し遥に見せた。
「俺も、好きな子にあげてくれって、ハルカちゃんから貰ったぜ。」
遥の手の平に、赤いビー玉を乗せた。
赤と青、２つのビー玉が、手の平の上で並ぶ。
２人で、ビー玉を見つめた。
遥が、口を開いた。
「そっか、ハルカちゃんが、うちにってくれたんか。」
そう言って、俺に青いビー玉を渡した。
「赤いビー玉は、うちが貰うわ。青いビー玉は、健志にやる。
だって、他の男からプレゼント貰ったらあかんやろ？」
「そうだな。遥が他の男に口説かれないように、今度ペアリング買いに行こうな。」

「そやな。」

色々あった1日だった。
遥とケンカして、同じ名前の迷子に出会って、
交番で遥に会って、遥と仲直りして。
隣を見ると、遥がうれしそうに歩いている。
幸せだと思った。
今から行きたい場所がある。
遥に問いかける。

「今からどうする？俺、行きたい場所があるんだけど。」
「うちも、行きたい場所があるんやけど。」

2人、口をそろえて言った。

「公園。」

手を繋ぎ歩き出す。
お互いの手に、赤と青のビー玉を握り締めて。

第6話（後書き）

最後まで、読んでいただきありがとうございました。
自己満足な作品ですけど、感想、ご意見などいただけると、うれしです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3153a/

ビー玉　。

2010年10月21日21時46分発行